

「日本写真保存センター」調査活動報告(31)

日本人の美意識を追求する写真家・西川孟

松本 徳彦 (副会長)

日本写真保存センターでは、わが国の歴史的・文化的に貴重な日本人の美意識や生活習慣、出来事などを記録した写真原板(乾板やフィルム類)を収集・保存し後世に遺し伝える作業を行っている。ここには明治、大正、昭和の約100年に及ぶ日本の姿を撮影された写真原板約40万点をデータベース化して、文化庁から貸与されている国立映画アーカイブの収蔵庫(室温10℃、相対湿度35~40%)で保存している。

センターでは収蔵している原板からプリントした写真「後世に遺したい写真」(2017年)を制作し、CP+横浜みなとみらいギャラリーと光村印刷ギャラリーで展覧するなどの活動をしている。2020年には、国立国会図書館が運営するわが国の文化資料を国内外に発信する「ジャパン・サーチ」と連携して、写真原板情報の発信を行うことにしている。

心魂を傾けた西川孟(1925~2012)の労作

この夏、土門拳の写真術や人生観に心酔した愛弟子の西川孟が撮影した写真原板を、ご遺族の西川香代さまから寄贈いただくことになった。原板は8月末、父の貴重な作品原板を宅急便で送るのはとても心配だからと、香代さまが自らの手で梱包されたトランクを、御徒町の写真保存センター分室までご持参いただいた。第1回目として氏の代表作『桂離宮』の写真集に使用された原板(4×5サイズのカラーポジとモノクロフィルム3,006枚)を受け取った。

西川氏は、京都の離宮や、龍安寺、西芳寺、伊勢神宮などの寺社、さらに姫路城、京都鳥原の角屋など、日本の文化史に燦然と輝く建築物や庭園などを撮影し、多くの写真集として発表している。なかでも代表作『桂離宮』(講談社、1977年)は、圧倒的な



園林堂脇の飛石

存在感がある。

ページをめくるたびに、「作品」が「ここを見よ」とばかりに強い視線を放つ。ただならぬ気配がそこに立ち上がり、目が釘付けになる。

「桂離宮」は西川が大阪で商業写真を撮っていたとき、土門拳の『室生寺』の写真集に出会い、写真とはなにかを突き詰めるために61年36歳の時、弟子入りを志願する。

あるとき土門さんと話す機会があった、西川は「自我を否定し、先入観を捨て去り、自分が小さくなって被写体の中に消滅したときに写真が撮れる」と話したところ、「その通り。俺は25歳のときそのことが分かった」と語ったという。

また、土門さんからは「写真家としての生き方」を、身をもって教えてもらったという。

「僕にとって人生と写真は同じ。土門さんのものをつくる人間の生き方を学んだ」。

桂離宮の構想を練っているとき、内藤昌著の『新桂離宮論』(鹿島出版会1967年)を読み、桂の造形の社会的・文化的背景を探ろうとする論に共鳴し、内藤氏の「適格な教示」を指標として「桂離宮の構想は約10年間かけて膨大な資料を読み、撮影に4年間のべ400日間通い、77年に講談社から写真集『桂離宮』(A3判、400頁、59,000円の豪華本)として出版された。写真集には内藤氏の論文、実測図が併載され、学術的にも貴重な書として海外(英、独、仏語版)でも高く評価され、ユネスコアジア文化センター賞を受賞する。

写真は恐ろしいまでの存在感、触覚さえも刺激する、質感を描写している。障子紙、古文書、木目、壁、釘隠しなどあたかもその空間に立つかのように「時空間」を共有する。「自分の意見を押し付けるのではなく、被写体



月波楼の間よりの化粧屋根裏詳細

の声を写す」、「主観を押し付けず、見えてくるものだけを写す」と述べ、日本人の美意識「雅」「あわれ」「幽玄」「わび」などを感じ取ることができる。

作家の佐多稲子氏は「西川さんは厳しく強い人で、いい意味で執拗でもあり、そして鋭い」と言う。私が1961年に、大阪在住の女友達数人と室生寺詣でをしたとき、土門拳の写真集『室生寺』を手引書のようにたずさえていた。室生寺の社務所の2階に宿を取り、そこで紹介された西川さんにこの写真集を見せたところ、『写真の凄さに感動し、昨夜は一睡もしなかった。』と話され、西川さんの仕事に対する人間の情熱に感動させられた。また、1978年に西川さんが出版された『桂離宮』の出版記念会で、西川さんは出席者へのお礼の言葉に続いて、写真集を印刷された人たちにお礼の言葉を述べ、自分に贈られた花束を手渡すなど、仕事を大切にされた人の情感として、私には美しく思えた。」と記す。(『日本の心 現代日本写真全集 京の離宮 集英社 1982年』)

西川孟は『京の離宮』巻頭の言葉「限りのない問い」で「写真家として歴史的なものを対象としている私にとって、被写体を認識するのは撮影するという手段しかない。直観という甚だ客観性のないものを唯一の手懸りとして夢中で対象を追う行為を続けているだけで、出来上がった作品は、望んでいたものと隔たりがあり過ぎて自己嫌悪に陥るときがある。遂に出来たと喜んででも自惚れは2、3日にして消え去る。」と厳しい。「作品には作家の人間性が反映する。対象との対話が成立するまで、ひたすら観察する。忍耐しかない。」と作家としての胸中を語っている。

追悼集『無我の軌跡 F64』より

狭き門より入れ。
滅びにいたる門は大きく、
その路は広く、
それより入る者多し。
いのちにいたる門は狭く、
その路は細く、
これを見出す者すくなし。



新御殿一の間上段



西川邸の写真原板保管タンスと遺影

『マタイによる福音書 第7章13～14節』

西川孟(孟宏)は、このような生き方を目ざしていたのではないかと思います。

激しい情熱の人、孤独の人、神の美と真とを執拗に追求し続けた人。

西川孟は、2012年10月25日に、その険しい87年9か月余りの生涯を閉じ、天に帰りました。

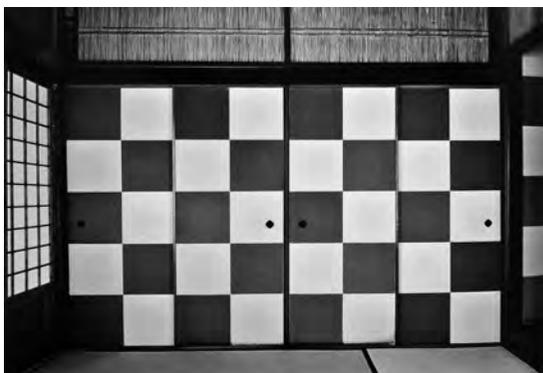
西川 静(西川氏夫人、『西川孟追悼集・無我の軌跡 F64』2013年)

私にとって父は、人生の一番の師であった。

私は、撮影の助手をしたというより、「教えていただいた」という方が相応しい。師・西川孟は、基本的なことを徹底し、一つでも欠けたことがあると、その重大さと責任をとことん追求する。「一つ間違えると全てが駄目になる」と烈火の如く、これでもかこれでもかと追い責めてくるのです。

西川香代(西川氏娘、『西川孟追悼集・無我の軌跡 F64』2013年)

保存センターでは、『桂離宮』の次に京都島原の『角屋』(83年 中央公論社)を、さらに『姫路城』(92年 新潮社)、『龍安寺』(89年 集英社)、『聖域 伊勢神宮』(94年 ぎょうせい)の写真原板の収集を続けていく予定である。



松琴亭一の間・二の間境